

増田所感

文学部の博士課程にとっても興味あります。文学部で研究して発見するとは？科学技術ではない対象が新鮮です。有名な日本の小説のネタ本（国内外）を見つけることも成果（博士課程）の一つらしい。AIが発達した今なら、読まなくてもデジタル的に類似度指数が計算できるだろう。

恥ずかしながら、“粉本ふんぼん”の意味がわからなかったので調べました。

- ① 東洋画で、絵の下書。したえ。
- ② 後日の研究や制作の参考として模写した絵画。
- ③ 参考とするもの。手本となるもの。模範 ← この意味で使っている

では本の目次を引用しながら増田の所感も述べます。

第一章 異端の文体が生まれたとき——耳から目へのバトン

- ① 三遊亭円朝『怪談牡丹燈籠』——耳が捉える落語の魅力
- ② 二葉亭四迷『浮雲』——最初の近代小説が生んだ新文体

増田所感

三遊とは「飲む、打つ、買う」の男遊びの事を初めて知った。江戸時代の文章は漢文や漢字カタカナまじりの文語体だけだった。落語の話し言葉を速記して、書き写したものが口語体の始まり。それが三遊亭円朝『怪談牡丹燈籠』であった。

三遊亭円朝『怪談牡丹燈籠』

落語の怪談噺で、明治の三遊亭円朝25歳時の作品。

浅井了意による怪奇物語集『御伽婢子』（寛文6年、西暦1666年刊）、深川の米問屋に伝わる怪談、牛込の旗本家で聞いた実話などに着想を得て、江戸時代末期の1861～1864年頃創作された[1]。1884年(明治17年)に速記本が刊行されている(ネットから)

二葉亭四迷『浮雲』

江戸文学のなごりから離れてようやく新文学創造の機運が高まりはじめた明治二十年に発表されたこの四迷の処女作は、新鮮な言文一致の文章によって当時の人々を驚嘆させた。

第二章 「女が書くこと」の換金性——痩せ世帯の大黒柱とセレブお嬢さま

- ① 樋口一葉『十三夜』——才か色か、女性に換金しえたもの
- ② 田辺花圃『藪の鶯』——セレブお嬢さまの自画像

増田所感

樋口一葉は24歳で没しているが5千円札の肖像画になった。お札の肖像画はみな中年以上の男であるが、若い女性は樋口一葉だけ。一葉のペンネームとダルマ大師の関係が面白い。彼女は貧乏で、生活のために小説を書く必要があった。女性が社会で活躍する黎明期の代表人物でした。まさか本人が日本国の銀行券に採用され、聖徳太子他、歴代の偉人と並ぶとは思っていません。



図3 お札になった樋口一葉

第三章 洋の東西から得た種本——模倣からオリジナルへ

①尾崎紅葉『金色夜叉』——換骨奪胎を超えた創意

②泉鏡花『高野聖』——染め出されていく源流

増田所感

明治時代、英語ができるのはインテリであった。西洋の本を翻訳し、その中のアイデアを手本にして日本人に受ける小説を書いた。その代表作が英語教師であった尾崎紅葉の『金色夜叉』であった。その弟子の泉鏡花も活躍した。『高野聖』は中国の妖怪ものに似ているとか。明治のインテリは漢文も英語もできた。この素養を生かして世界の知識を日本に取り入れヒットした。投資の世界ならブルーオーシャンの開拓者です。

有名な小説ですが読んだことがありません。粗筋だけでも話せるようにしたいです。

尾崎紅葉『金色夜叉』

『金色夜叉』（こんじきやしや）は、尾崎紅葉が書いた明治時代の代表的な小説。読売新聞に1897年（明治30年） - 1902年（明治35年）まで連載された。

泉鏡花『高野聖』

泉鏡花の短編小説。当時28歳だった鏡花が作家としての地歩を築いた作品で、幻想小説の名作でもある。高野山の旅僧が旅の途中で道連れとなった若者に、自分がかつて体験した不思議な怪奇譚を聞かせる物語。難儀な蛇と山蛭の山路を抜け、妖艶な美女の住む孤家にたどり着いた僧侶の体験した超現実的な幽玄世界が、鏡花独特の語彙豊かで視覚的な、体言止めを駆使したリズム感のある文体で綴られている。

第四章 ジャーナリズムにおけるスタンス——小説のための新聞か、新聞のための小説か

①夏目漱石『虞美人草』——新聞小説としての成功と文学としての“不成功”

②黒岩涙香『巖窟王』——新聞売り上げのための成功手段

増田所感

夏目漱石も英語ができ、英語の先生として松山に赴任した。後に大阪朝日新聞社のおかかえ作家であった。定職があるのは生活が安定する。『虞美人草』の由来は、ふと通りすがった植木屋にこの花は何？と聞いたら虞美人草と答えた。虞美人草はポピー、ヒナゲシの和名でケシ科ケシ属の一年草・多年草です



第五章実体験の大胆な暴露と繊細な追懐——自然主義と反自然主義

①田山花袋『蒲団』——スキャンダラスな実体験

②森鷗外『雁』——やさしい追憶

増田所感

自分の私生活の恥部も顕に小説にしてしまう。私は読まない小説です。

絶対に読まないからネットであらすじを調べました。調べて納得、私のモットーに合わない。

田山花袋『蒲団』

蒲団に残った女の残り香をかぐ最後の場面は余りにも有名。藤村の「破戒」と共にその後の日本近代文学の方向を決定づけた記念碑的作品。

森鷗外『雁』

望まれて高利貸しの妾になったおとなしい女お玉と大学生岡田のはかない出会いの中に、女の自我のめざめとその挫折を描き出す名作。作家志望の小泉純一を主人公に、有名な作家、友人たち、美しい未亡人との交渉を通して、一人の青年の内面が成長していく過程を追う。

やっぱりオイラはアドベンチャー、SFやサスペンスが好きです。

第六章妖婦と悪魔をイメージした正反対の親友——芸術か生活か

①菊池寛『真珠夫人』——新時代の妖婦型ヒロイン

②芥川龍之介『侏儒の言葉』——警句の普遍性

増田所感

青空文庫で『侏儒の言葉』をいくつか読みました。これは芥川龍之介が日々感じている雑感（思想、性格）を綴った随筆で、社会風刺とは違うものでした。龍之介の親友の菊池寛の小説は読んだ事ありません。菊池は生活のために職業作家として新聞、雑誌、書籍等で求める作品を出していた。一方芥川は理想が高い芸術家タイプであり、逆に自分追い詰めて東京田端の自宅で35歳の若さで自殺してしまった。

青空文庫

青空文庫は、日本の電子書籍サービス。著作権が消滅した作品や著者が許諾した作品を、電子書籍で公開し無料で提供している。ボランティアにより運営されており、広告収入や基金、助成金などで成り立っている。無料のアプリを使ってPC,iPad,携帯電話で読める。増田は20年前から利用しています。

菊池寛『真珠夫人』

美貌の未亡人瑠璃子が、男性のエゴイズムに復讐しながら、最後は彼女を慕う青年に殺されるまでを描いた長篇小説。

芥川龍之介『侏儒の言葉』

『侏儒の言葉』は、芥川龍之介の随筆・警句集。大正12年から、芥川自殺の年である昭和2年にかけて書かれた。また、文藝春秋社の雑誌に、1923年1月号から1925年11月号にかけて連載された。なお、1939年に軍人を侮辱しているという理由で次版改訂の処分を受けている。

侏儒（しゅじゆ）

- 1 背丈が並み外れて低い人。こびと。
- 2 見識のない人をあざけってという語。

侏儒国（しゅじゆこく）

古代中国の後漢書や魏志に登場する邪馬台国の南方にあると考えられていた小人の国である。黒齒国、裸国とともに記述されている。



左から宇野浩二、芥川龍之介、菊池寛 大正9年、大阪・堀江の茶屋にて。前年に、「大阪文化の抜本的改革を提唱する美術・文学・哲学など

図4 芥川龍之介と菊池寛

恐らく芥川龍之介は日本を侏儒国とみなして題名をつけてのではないか？（増田）

今月のなごみ1 藤沢鵜沼の東屋旅館の跡地

湘南の文学を語るとよく出てくるのが鵜沼の**東屋旅館**です。もとは避暑地、レジャー旅館として1897年（明治30年）頃から営業し、多くの文人が利用した。、1939年（昭和14年）の廃業まで数々の作品に登場する。特に芥川龍之介の『蜃気楼』に鵜沼海岸の様子が書いてある。抜粋する。

ある秋の午（ひる）ごろ、僕（ぼく）は東京から遊びに来た大学生のK君と一しょに蜃気楼（しんきろう）を見に出かけて行った。鵜沼（くげぬま）の海岸に蜃気楼の見えることはたれでももう知っているであろう。

僕らは東家（あずまや）の横を曲がり、ついでにO君も誘うことにした。

今日、2023(R5).12月に東屋旅館の跡地の写真を撮ってきました。ここに大きな池があって、船も浮かんでいた風景を想像してみました。

私が江ノ島の前の老人ホーム鵜生園で大人の塗り絵教室を開いたとき、とても几帳面に描く長谷川さん（80歳ぐらいのご婦人）がいました。この人の家が東屋を営業していた長谷川家の人でした。この人は直接旅館の営業には関わっていませんが、家に残っていた様々な文士との交流の品物の話をしてくれました。



図5 関東大震災前の東屋旅館



図6 現在の東屋旅館記念碑(2023.12撮影)